

グローバル人材への第一歩

理系、複合・融合系人材コース 第2期生 藤田 駿

所属：理工学系機械工学コース

留学時学年：学部3年

留学先：ノッティンガム大学（イギリス）

実践活動：小型ヨットを製作するプロジェクト・ベースド・ラーニングに参加



ノッティンガム大学構内をサイクリング

◆留学動機

一年生の際に国際センターで募集されていた短期英語研修へ参加し、語学力の欠如を痛感させられた。また、乗り物に興味を持っていたため、首都大で学習している機械工学を乗り物へ応用する知識を学習したいと考えていた。そこで、語学力向上と新しい専門知識の獲得を目的として留学することにした。

留学先には機械工学に関する授業が豊富に用意されているノッティンガム大学を選択した。しかし、この大学は学費が高く、かつ非交換型留学先であることから留学費用が高い。そこで、経済的支援が手厚いトビタテより支援金を受給させていただくことにした。

◆留学内容

留学中は学修活動と実践活動に取り組んだ。学習活動では機械工学の乗り物への応用をテーマにした授業を中心に受講した。例えば自動車工学の授業では興味を持っている自動車の構造や動作原理について、日本で学習してきた機械工学の基礎を活用して説明されており、興味深く受講することができた。他にも留学生向けの語学授業を受講し、留学に必須となるアカデミック英語を学習した。講義では多国籍の大学生とディスカッションをする機会が豊富に与えられていたため、お互いの文化の違いについて議論をすることもできた。



プロジェクトで製作したヨット

実践活動では、現地学生と自動で航行するヨットを製作するプロジェクトへ参加した。これは小型のヨットを製作してあらかじめ決められたコースを自動帆走させるもので、プロジェクトには機械工学的な知識の他にプログラミングスキルが求められた。機械工学の知識とプログラミングを組み合わせた実践的な体験を得ることができた。留学先大学での一連の活動を通じ、首都大での授業とは異なる視点からの学習を体験できたといえる。

一方、授業を通じて語学力の不足を再度痛感させられた。講義にははたくさんの専門的表現が見られたほか、講義中の激しい質問にはついていくことができなかった。このため、全く授業内容が理解できないことが多く、悔しい経験となった。学生寮での日常生活においては異文化理解力の欠如が痛感させられた。水回りが現地学生と共同の生活は、生活パターンや習慣の違いからストレスが蓄積していた。また、共同で行った実践活動についてもコミュニケーション不足により作業が大幅に遅れることがあった。

◆帰国後

帰国後半年以上が経過した現在では英会話学習に取り組み、語学力の改善を図っている。また、首都大での学術的な基礎研究に並行してインターンシップを経験し、機械工学の実用的側面を体験して留学中の体験をさらに深めている。今後は定期的に海外の中長期滞在を経験することで語学力の状況を確認、改善するほか今回課題となった異文化理解力の改善に努めたい。

日本国内と海外では環境が大きく異なると言われることが多いが、通常の大学生活ではそれを実感する機会は少ない。一方、国際社会のグローバル化は進展しており、就職後に海外との交流の場が増えることは明らかであるため、グローバルな人材として自分に不足しているスキルに学生の段階で気づくことは非常に重要となる。留学はその気づきを得ることができる効果的な機会であり、今後に生かすことで成長も期待できる。多くの方に留学を経験していただきたいと思う。

